

## 老人たちに「理想郷」を 手作りホームに賭けた “シニア”・ベンチャー

「ぴあは」と藤が丘 経営 岡崎 公一郎さん  
……………  
自分のやりたいことをやって終わりたい  
エリート鉄鋼マンが選んだ第二の人生

横浜市青葉区藤が丘、東急田園都市線藤が丘駅前にある有料老人ホーム「ぴあは」と藤が丘。オープンして今年でまる九年を迎える。駅周辺はご他聞に洩れず、不況の影響からか人通りの少ないシャッター通り化しているが、「ぴあは」と藤が丘は人の出入りが絶えない活気を見せている。

「おかげさまで入居率はオープン八カ月目から常に満杯です。いまでも入居希望者が何人かおられますが、こればかりはいつ部屋が空くかわからないものですから」

とホームを経営するシニア・エンタープライズ社長の岡崎公一郎も嬉しさを隠さない。最近、彼に朗報があった。それは「週刊ダイヤモンド」誌が掲載した「有料老人ホーム・ベストランキング」神奈川篇で「ぴあは」と藤が丘が一九〇ホーム中一三位にランクされたことだった。①入居率②看護・介護

体制③介護福祉士の比率④事業経験年数など八項目をそれぞれ点数で評価したもののだが、一〇〇点満点中七七点を獲得しての一三位だった。

「上位に来ているのは、入居金が二〇〇万円以上の高級ホームが多い。ホテルみたいな老人ホームですから、なかなか対抗するのは難しいです」

と岡崎は語るが、それにしても一三位という上位にランクされたことは、彼の地道な努力が報われてきたという意味で、嬉しい手ごたえだったことは確かだ。

岡崎は昭和三年生まれの六一歳で、元は日本一の製鉄メーカー・新日鉄に勤めるエリートサラリーマンだった。

「ご承知のように九〇年代に入ると、バブル崩壊の影響から鉄鋼メーカーもリストラに着手し早期退職制度、子会社や関連会社への出向などの人員削減策を導入した。

新日鉄も同様で、当時四〇代の後半に入っていた岡崎にも、出向人事の順番が回っていったところへ出向させてくれ」と新日鉄を離れることに激しい抵抗を見せるひとたちもいた。ただ岡崎は違っていた。

「一回しかない人生ですから、第二の人生は自分のやりたいことをやって終わりたい」そう思ってたのが福祉関係の事業。世

話好きな性格、六〇種ほど（当時）の公的資格をもっていたこと、そして二年ほど前に母を失ったこともあり、彼は有料老人ホーム経営をそのチャレンジ目標とした。そこでまず彼は経営ノウハウを得るために老人ホームへ飛び込むことにした。ただし出向する場合は新日鉄に関係したところが原則。さもないと給料は保障されない。

彼は老人ホームの資料をいろいろ集め、検討した。そしてここだと目星をつけたところがあった。ところがそこは新日鉄とは無関係。そこで岡崎は会社と交渉をする。

「ぜひAホームへ出向させてほしい」「Aは会社と何のつながりもないところだし、調べたあたりあまりいいところとも思われない。やめといたほうがいい」「給料は半分にしてもらっていい。ぜひ出向させてほしい」

こう言って彼は出向を勝ち取った。  
女でもできたんですかと迫る夫人  
立ちほだかつた法律や規制の壁

結局、彼は二カ所のホームで都合四年間、働くことになるのだが、一カ所などは案内書の美しい言葉とは裏腹に、設備といいサービスといい全く劣悪な内容のホームだった。彼は言う。

「ひどいホームはホームで勉強になりました。反面教師というか、自分がホームを作る

ときは、これと反対のことをやればいいホームができるはずだ」と

彼はその二カ所の老人ホーム勤めで学んだこと、経験したことを克明にノートに記録していった。それが独立に際して大きな武器になったことは言うまでもない。

九九年二月、彼は独立を決意し不動産物件を探し始めた。夜になると奥方にも内緒でパソコンと出かけては帰ってくる。ある時には夫人からその行動を怪しまれ、「女でもできたんですか。正直に言ってください」と問い詰められる一幕もあったという。夫人は独立には反対だった。

五〇件以上の物件を見て回り、やっと現在の藤が丘駅前に空き家となっていた建設会社の寮を見つけ契約した。そして一月に「シニア・エンタープライズ」を設立し、改造工事を終えて入居者募集に漕ぎ着けたのが、翌二〇〇〇年六月だった。

ただ民間で福祉事業を行う場合、様々な法

律や規制の壁がある。経営者の所得証明から始まり消防法、建築基準法等々、細かな基準や規制があり、一時は彼も独立をあきらめかけたほどがんじがらめになっているという。それは日本人の起業家精神を喪失させている一因である。

入居者一・七人に対しスタッフ一人  
大型バスを運転し、ピアノも手品も

さて三室のホームをオープンしたが、果たして入居者があるか否か。岡崎は不安な日々を過ごした。オープンした六月は四名の入居者があったが、七月はゼロ、八月も前半まで手ごたえがまったくなく、岡崎は焦った。貯金は設備投資で消えてしまったし、八月九月の入居者がゼロだった場合は、ヘルパーや職員などの給料が払えない。

彼は銀行へ駆け込み、借入れの交渉をした。銀行からは冷たく突き放された。「こんなことで負けられるか」——突き放されて彼の反骨精神が燃え上がる。彼の宣伝・PR作

戦が功を奏し始めたのか、八月中旬を過ぎたら入居者が増え始め、結局八月四人、九月五人の契約が成り、その後も平均月四人、多いときには七人も入居者があり、八カ月後の〇一年二月までに全三室が埋まってしまった。以来、今日まで同ホームは常に満室である。

それだけ「ぴあは」と藤が丘の評判が高いということだろう。現在、入居者一・七人に対しスタッフ一人と手厚い体制で介護・看護を行なっている。

また、壁の予定表を見るとイベントがぎっしり。お年寄りを退屈させず、元気づける様々な工夫が行なわれている。外食ツアー、カラオケ、音楽セラピー、陶芸鑑賞会、朗読、絹糸工芸画教室など、年間二五〇ほどのイベントが組まれているという。岡崎は前述のように公的資格を六〇以上有する多才多才の人物。外食ツアーのときは自ら大型バスを運転し、ピアノも弾けば手品も操る。

同ホームへ行くと、岡崎電機製と名称の入った器具があちこち目につく。彼が製作したもので省エネ、防犯、防災、転倒防止、管理能率向上など三五装置を自ら考案・製作して使っている。もともと彼は理工学部機械科の出身で、新日鉄時代は工場管理や設備の技術者として活躍した。エアコン制御などお手のものだ。

「自家製のエアコン制御装置で電気代が半分になり、その節約分でナース八人体制になり、夜勤もできるようになった。一つ一つサービスを充実させ、さらに評価ランキングを上げていくことが目標です」

シニア・ベンチャー岡崎は、確実に充実した第二の人生を選択したようだ。（敬称略）



岡崎 公一郎さん